

国語科教員養成に関する一考察(一)——「国語科教育法Ⅰ」を中心に——

渡辺春美

はじめに

沖縄国際大学には、教育職員免許状取得のための課程(以下、教職課程)が置かれている。教育職員免許状取得のためには、教職に関する科目を中学校教諭一種で三一単位、高等学校教諭一種で二三単位を取得し、さらに、教科に関する科目を三六単位以上取得しなければならない。教職に関する科目の内、国語科教育法に関する科目の教育課程は、後に詳しく述べるように、「国語科教育法Ⅰ」(国語科教育概論 二年次後期 二単位)↓「国語科教育法Ⅱ」(教材研究 三年次前期 二単位)↓「国語科教育法演習Ⅰ」(模擬授業 三年次後期 二単位)↓「国語科教育法演習Ⅱ」(模擬授業 四年次前期 二単位)と段階的に履修することになっている。この後、教育実習(中学校三週間 四単位、高等学校二週間 二単位)を行うことによって教育職員免許状を取得することができる。例年、日本文化学科で教員を志望する学生は多く、四〇〜五〇名が国語科の中・高等学校教諭一種の免許状を取得している。

今日、教員のあり方が、かつてないほどに厳しく問われている。教科に関する専門的な知識と授業実践力はいまでもなく、道徳(小・中学校)・総合学習・特別活動に関する指導力や生活指導力が求められるとともに、人間の成長・発達に関する深い理解、さらには使命感や教育的愛情が求められている。教職課程では、このような厳しい問いを意識しつつ、問いにこたえるべく指導を行うことになる。国語科教育法もまた同様である。

本稿では、「国語科教育法Ⅰ」を取り上げて考察を加えたい。教員のあり方が厳しく問われている現在、その内実を検証し、改善に努めることは、今日の課題に込めることに繋がることでもある。具体的には、まず国語科教員養成課程の構想を略述し、ついで、「国語科教育法Ⅰ」の実際を紹介するとともに、できるだけ受講者の発表資料やノートに基づいて考察を加え、その有効性と課題とを明らかにしたい。

一 国語科教員養成課程の構想

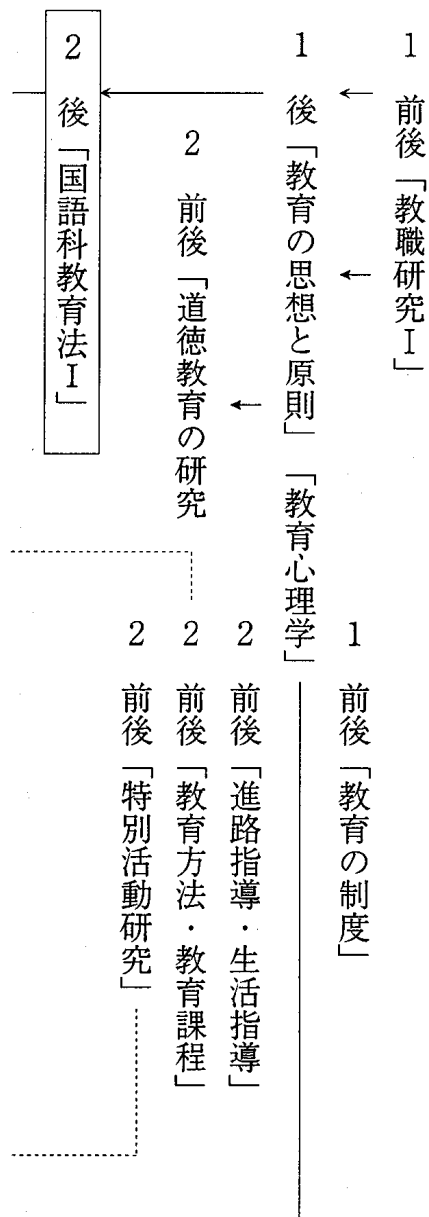
1 国語科教員養成の目標

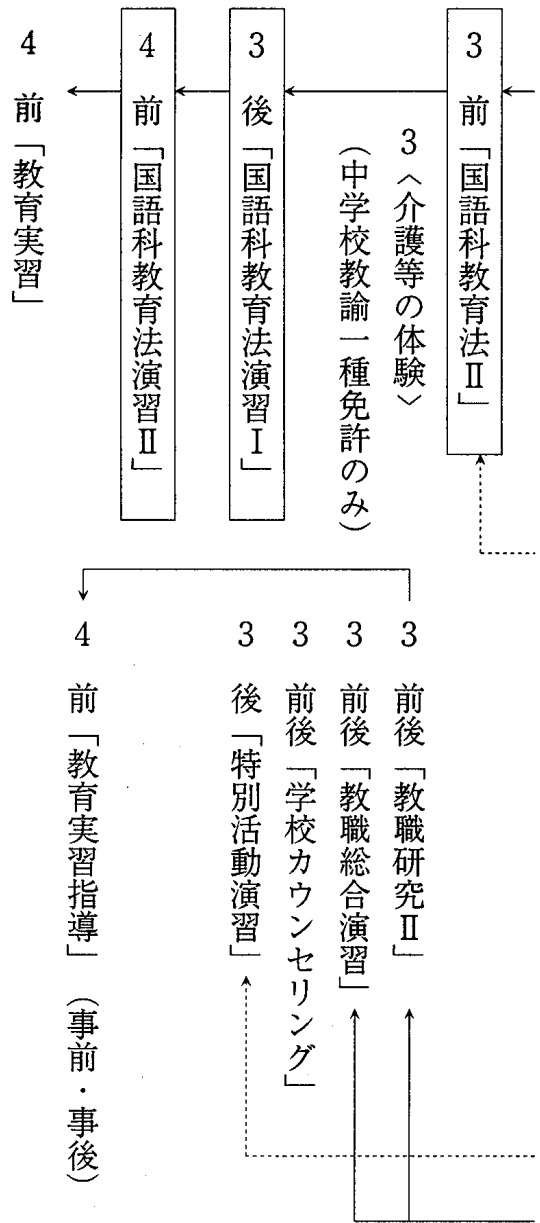
国語科教育法に関する科目において、全体として、次のような国語科教員養成の目標を立てたい。

- ① 国語科の学習指導の内容に関する知識・認識（言語・言語活動・言語文化・言語生活・言語習慣等）を広げ深める。
- ② 国語教育に関する知識・認識（教育史・目的・方法・領域・学力・教材・評価など）を広げ深める。
- ③ 国語科授業力（学習者把握力、教材把握力、授業構想力、授業実践力、授業評価力）を育てる。
- ④ 国語（科）教育研究力をつける。
- ⑤ 言語生活を自ら向上させる力を育てる。

2 教育課程―履修体系

国語科教育法に関する科目の履修体系を教職に関する科目全体の履修体系とともに掲げれば、次のようになる。





3 教員養成課程の構想

(1) 構想の基本

国語科教員養成の目標「②」「③」「④」に関わって、授業記録の意義を認識させ、記録を取ることができるようにすることを教員養成課程に導入したい。その構想の基本として、次の三点を掲げる。①国語教育個体史の意義の理解、②授業記録・実践論考に学ぶことの意義の理解、③授業記録を残し、実践論考にまとめることの意義の理解。①については、国語教育個体史について理解させるとともに、その基底に授業を記録することがあることをとらえさせ、その意義を理解させる。②については、記録の方法を理解させる。また、優れた点に学び、学んだことを学生個々の授業構想と関連づけて生かすようにするとともに、実践上の課題についてもとらえさせることを通して、記録の意義を理解させる。③は、実際に授業（教育実習における授業）を記録させることをとおして、記録の方法を身につけさせる。また、記録・考察をとおして課題に気づかせ、記録し考察することが、授業改善につながることを理解させる。

授業を記録することの意義については、野地潤家氏の国語教育個体史の考えに求めたい。野地潤家氏は、国語教育個体史を「国語教育の実践主体が、自己の国語教育への成長過程、さらには国語教育（実践主体）としての実践営為の展開、国語教育者としての生活を、主体的に組織的有機的に記述したもの」（『国語教育—個体史研究—』一九五六年三月 光風出版刊 二一頁）とした。その上で、「実践主体は、まず自己の国語教育事実をたえず見つめていかななくてはならない。そのほかに、自己の営む国語教育があるのではない。その国語教育事実を即して、自己の国語教育実践を把握していかななくてはならない。／国語教育個体史が見失われては、国語教育の着実な実質的前進は期待しがたいのである。」（二二頁）と説いている。「自己の国語教育事実をたえず見つめ」とは、「謙虚にしかも自信をもって、ある時はさんげの念をこめて、把握し記述していくこと」（二二頁）とされる。一人ひとりの実践主体の主体的営みとしての教育事実の把握と記述なくしては、国語教育の着実な前進はあり得ないとされている。ここに授業を記録することの意義が見いだされる。

（2）構想

先に述べたとおり、教育課程は、①国語科教育法Ⅰ（二年次後期）、②国語科教育法Ⅱ（三年次前期）、③国語科教育法演習Ⅰ（同後期）、④国語科教育法演習Ⅱ（四年次前期）となっている。この後、⑤教育実習が課される。

この内、①では、国語科教育概論として、国語科教育の意義、目標、戦後国語教育史について概観するとともに、国語教育個体史について理解させる。その後、テキストを基に、表現・文学・説明的文章・読書・音声言語・言語事項の各教育について、史的概観、教育目標・内容・方法・課題等をまとめ発表させるとともに、各教育のそれぞれの授業記録（実践論考）を探し求め、紹介、検討する。②は、教材研究として、各教材の授業記録を先行研究として検討させ、指導案まで作成させる。③④は、模擬授業が中心であるが、教材に応じた理論と優れた授業記録（実践論考）を紹介し、その応用を図る。また、自らの模擬授業を記録し、考察させる。⑤の教育実習では、自らの授業を記録し実践論考にまとめさせる。

二 学生の国語科教員志望の契機

学生は、どのような契機によって国語科教員を志望するに至ったのであろうか。「国語科教育法Ⅰ」の開講式で、「私が国語科教員を目指すに至ったきっかけ」というテーマで行った一分間スピーチの原稿を整理すれば、次のようになる。

(1) 教師との出会い

- ・ 一人一人を大切にしている教師、楽しい授業をする教師
- ・ 学ぶ楽しみを与えてくれた教師
- ・ 熱意のある生き生きとした、楽しい授業をした古典の教師
- ・ 勉強の楽しさを教える教師
- ・ 生活に生きる教えを与えてくれた教師・親身で心に残る言葉をくれた教師
- ・ 厳しくやさしい部の顧問、心を動かす言葉をかけてくれた部の顧問
- ・ 夢を与えてくれた教師
- ・ 教師の熱心で活発な指導（教師の仕事を輝いた存在として認識させた教師）
- ・ 生徒に慕われ、将来の目標とされる部の顧問教師
- ・ 親しく心の距離の近い存在の教師
- ・ 教師に対する不平不満

(2) 肉親の教師の影響

- ・ 母が教師―身近な職業↓生徒の成長に携わりたい
- ・ 生徒に真っ直ぐで最善の接し方をしようとする教師の母、よく努力し、熱心に指導する教師の母
- ・ 教え子に慕われる教師の叔父
- ・ 退職後も先生と呼ばれる祖父

(3) やりがいのある仕事

- ・多感な生徒に与える影響の大きさ
- ・人の持つ可能性を広げる教育と教師への関心
- ・地域の文化を伝えることのできる最高の手段
- ・母語を正しく使いこなせるように、国語力を伸ばす教師が目標

(4) 国語が好き

- ・国語のおもしろさ、文学のおもしろさ
- ・読書が好きで、好きなことをやっていきながらそれを仕事にしたい。

(5) 学校生活

- ・いじめに会った―生徒の変化に気づける教師
- ・授業での教え合いの経験―教え、相手が理解した時の喜び

(6) その他

- ・教師を目ざす仲間との出会い
- ・感動を求めて教師になる
- ・沖縄の歴史を知り、戦中の教育に対する命を大切にしたいと思った。

国語科教員志望の契機を、上記のように分類した。これらの中には、スピーチ用に整えられた契機もあると思われるが、参考にはなるであろう。分類によれば、「教師との出会い」が最も多い。しかし、それも一様ではない。むしろ一人ひとりに、思いの深淺とともに固有の志望の契機があるともいえる。次に三人の学生のスピーチ用原稿を紹介する。

①私が教師を目ざしたキツカケは、高校二年生の時に担当していた、国語の先生です。先生の行う授業は、毎

回楽しく、おもしろく、私は、国語という教科の知識だけではなく、「学ぶ楽しみ」を知ることができました。「先生のような授業をしたい」そう思ったことが、今の私につながっています。教職は辛く、険しい道ですが、すばらしい先生と出会えたことを無駄にしないよう、この国語科教育法Ⅰでも多くのことを学んでいきたいと思っています。

(二年次 G・A女)

②私にはこれといったきっかけがありませんでした。教職課程は、興味があつたのと、母や友人達にとっておいた方がいいと言われた事もあつて履修しました。初めは教職を続けるか迷っていましたが、先輩方との触れ合いや合宿を通して「本気で教師を目ざしてみよう」と思うようになりました。

また高校生の時、この国文学科出身の教師がいました。最近彼女に会った際、同じ学科で教職をとっている事を話すと、「がんばって教師になって、今度は同僚になろうね」と励ましてくれました。彼女の人を元気にしてくれる笑顔や、生徒と楽しそうに話している姿が好きだった私は、彼女のような教師になりたいと思いつつ、いつか同じ場所にたてるようにがんばっていききたいです。

(二年次 K・S女)

③私は教師になりたい、というこの気持ち、本物なのかまだ分かりません。いきなりこんなことを言う、「けしからん」と怒られそうですが、教師という職業が、本当に私に向いているのかがよく分からないのです。こんな私がなぜ教職の道を進んでいるかという、教師である両親の影響が大きいと思います。小さい頃から見続けてきた両親の背中が大きく、教師はとても身近に感じられる職業でした。しかし、夏季合宿で、遠藤先生の「傷つくことが嫌なら教師になるな。それを乗り越えられる教師になりなさい。」という言葉に私はハッとしました。私には教師を目指す資格があるのだろうか……。衝撃と焦りで胸がドキドキしたのを覚えています。しかし私はこのまま何もせずに中途半端にたくありません。私にも教師を目指す資格と可能性があるのか、じっくり、しっかりと考えていきたいです。

(2年次 K・S女)

①の場合には、「すばらしい先生と出会ったことを無駄にしないよう」「多くのことを学んでいきたい」と教員を目指すことへの確かな思いを述べている。②は、興味はあったものの、消極的・受動的な志望から出発しながら、「先輩方との触れ合いや合宿を通して『本気で教師を目指してみよう』と思うようになつたと述べ、さらに先輩教員の励ましを得て積極的な姿勢を持つに至っている。③では、両親の影響のもとに教員を目指していたが、本学教員のことばに触れて、改めて教員を目指す資格と可能性を自らに問おうとしている。学生の教員志望の契機も思いも、実のところは多様である。教職課程は、そのような学生を受け入れ、学生一人ひとりの資質と可能性を自ら問い直させる場を設けつつ、優れた知識と実践的な技能を身につけた教員の養成を目指しているといえる。

三 「国語科教育法Ⅰ」指導の実際

(一) 「国語科教育法Ⅰ」の指導計画

指導計画を、二〇〇三年一〇月七日の開講式で配布した計画表によって掲げれば、次のとおりである。

(1) 目標

①国語科教育の諸領域に関する歴史と理論の概要を理解する。②国語科教育の諸領域に関する実践事例を検討し、優れた点に学び、生かせるようにする。③朗読の方法に学び、よりよい朗読ができるようにする。④以上をとおして、国語の力(ア・読解力、イ・表現力、ウ・話表力、エ・聞解力)をつける。

(2) テキスト

森田信義・山元隆春・山元悦子・千々岩弘一著『新・国語科教育学の基礎』(二〇〇〇年四月 溪水社)

(3) 方法

- ①各班Aの者は、テキストの該当箇所を読み合わせ、レポート(B4用紙)して発表する。
- ②各班Bの者は、テキストの該当内容に関する実践記録を紹介・考察する。
- ③発表者以外の者は、毎回、発表対象となるテキストの範囲を精読し、疑問点と感想を書きまとめて講義に臨む。

- ④一回、四・五人が、二分程度朗読を行う。芥川龍之介「羅生門」・中島敦「山月記」・森鷗外「舞姫」・『平家物語』の「扇の的」を教材とする。

(4) 日程

一〇月 七日 開講式

一三日 野地潤家博士講演「教師の授業力の向上」

一四日 豊かな国語教育を目指して(講義)

二一日 表現教育の研究

二八日 表現教育実践の考察

一月 四日 文学教育の研究

一一日 文学教育実践の考察

二五日 説明的文章教育の研究

一月 二日 説明的文章・評論・論説教材の教育実践の考察

九日 読書教育の研究

一六日 読書教育実践の考察

一月 六日 音声言語教育の研究

一三日 音声言語教育実践の考察

二〇日 言語事項指導の研究

二七日 言語事項指導実践の考察

(5) 評価

評価は、①発表、②朗読、③ノート、④出席状況、⑤「国語科教育法Ⅰに学んで」による。

(二) 「国語科教育法Ⅰ」指導の実際

1 朗読(範読)の指導

朗読(範読)は、一時間に四・五名、一人約二分、机間を歩きながら行うこととした。朗読担当者の全員が終わった後に、指導者(渡辺春美)が担当者一人一人に対して講評を行った。

学生のノートのメモから講評のいくつかを引用すれば、次のとおりである。

①「羅生門」の朗読への講評

H・H(女)・・・声が細い。お腹から声を出すこと。発音は明瞭。イントネーションが山形(渡辺注―山形に節をつけて読む癖がある)。

T・K(女)・・・強弱があつてよい。しかし、切りすぎている。

K・S(女)・・・声の大きさ・発音がよい。語尾がのびている。切りすぎ、どの言葉を強調すればよいか。

K・M(男)・・・元気・ハリのない声。切りすぎ。もっと緊迫感を出した方がよい。

N・K(女)・・・切りすぎ。ぎこちなく聞こえる。句読点に左右されなくてもよい。

②「山月記」の朗読への講評

U・T(女)・・・大きさはよい。緊張か?きりすぎ、そして、くせ(渡辺注―節をつけた読み癖)が出来ていない。P 26 L 9など。

M・Y (男) . . . 大きさはよい。意味をとらえた読み。もう少しゆっくり。P 27の漢詩の後は、少しマまをとつて、余韻を。

Y・Y (女) . . . 少しはやい。文の意味のまとまりをもつて読むことができる。P 28「羞恥心に近い」に（渡辺注―「を」の誤り）強くした方がいいか。プロミネンス。

Y・A (女) . . . スピードよい。意味をとらえている。しかし、単調。間の取り方を考えて。

H・S (女) . . . ハスキーな声。もつとゆっくり歯切れよく。もつとよくようをつけて。最後（渡辺注―作品の最後）は余韻を残すような読みを。まだ続くような感じがする。

③「舞姫」の朗読への講評

T・A (女) . . . 声が小さい。しっかりと声を出すこと。言葉の切れが悪い。ハリがない。緊張を乗り越えてほしい。自信をつけて。

N・S (女) . . . 声の質か、発音・発音がクリアでない。しかし、練習しているのが伝わってくる。

M・K (女) . . . ハリがある。もう少しゆっくり。抑揚がなく単々マとし、気持ちが伝わりにくい。会話と地の文を区別すること。後半はよくなっていた。

N・J (女) . . . ハ行がダメ。歴史的仮名使用マとの区別を。やさしい人からか、のんびりしてしまいすぎている。もつとキビキビと明瞭な読みを。間の取り方も変。言葉の意味がつかみにくい。

（以上、O・Y女のノートより引用）

④「扇の的」の朗読への講評

I・S (女) . . . 声のとおりがよかった。ふさわしい読み方だった。出だしをどうするかを考えてほしい。

O・Y (女) . . . いい声をもっている。りんとした声。漢字の読み方を二カ所まちがえている。

N・K (女) . . . 出だしが暗くて弱い。／軍記物語はもつとしっかり読む。淡々とした読みよりもつと緩急をつけてよむ。

H・T (男) . . . 大きくよくとおる、いきおいのある声でよかった。

Y・Y(女)・・・聞きやすい声をもっている。漢字の読み違い。

(以上、H・A女のノートより引用)

講評は、教室での範読ということ为前提として行った。メモに拠れば、講評は、ア・発音・発声、イ・声の大きさ・声の通り・勢い、ウ・音調、エ・声の質、オ・間、カ・緩急・強弱、キ・意味表現・プロミネンスに及び、他に、始め(出だし)と終わりの読み方や句読点の読み方、読み間違いについても指摘している。

2 朗読(範読)後の感想

何名かの学生が、「『国語科教育法Ⅰ』に学んで」の中で朗読に触れていた。

朗読への取り組みについて、例えば一人の学生は、「朗読では、完璧さを追求しました。内容を覚える程読みこみ自分なりに流れを作る、そして声を大きく出すようにするといった基本的なことを朗読までの2週間毎日行って努力しました。人前に出ることが苦手な私にとって朗読や発表はとても苦手な分野ではありましたが、自分なりの工夫、考えで精一杯がんばったと実感しています。」(N・H女)と述べている。また、別の学生は、「朗読はとても楽しく取り組みました。家の中はもちろん、車の中、入浴中にも練習し、朗読発表のときにはほとんど覚えていたので、みんなの反応を見ながら朗読することができました。」(S・C女)と振り返っている。ともに朗読に対する努力と取り組みの真剣さが伝わってくる。

中に、「私は今回、せっかく朗読を毎時間聞けるので、評価とまではいかななくても、思ったこと、感じたことをメモすることを心がけました。私が書いたことと先生が批評したことが一致したりすると、少しは成長したのかなと秘かに喜んでいます。」(I・Y女)と述べている学生がいた。毎時間の朗読をとおして、自らの朗読評価力をつけようとしたものである。この学生を含め二名が自らの批評をノートにメモしていた。「(Y・A女に対して―渡辺注)声が小さい。腹から声を。語尾が上がる。もう少しメリハリのある読みを。一定調子。声はきれい。(M・Y女に対して)かつぜつがよい。声も出ている。少し低くなる時に、のどにかかったような感じになる。もう少し、文頭を高

く入るとよい。」(O・Y女)など、鋭い批評がうかがえる。
次に、朗読に関する三名の感想を紹介する。

①今回、国語科教育法Ⅰを受講して、国語教育について初めて学び、さまざまなものを得ることができました。まず、朗読の仕方では、さまざまな作品によって読み方や声のトーン、スピードなどが異なり、また一つ一つ意味を捉えて読み進めていかないと相手の伝わり方が違ってくるなど、朗読一つにしても、いろいろな注意が必要であり、また練習が必要であることを実感させられました。

初めて、朗読をすることになり、とても緊張し、全然、前に立つことに慣れていないことと、自分の読み方の欠点など、気づかされた部分や参考になるものなど、いろいろあり、いい経験ができたと思いました。また、まだまだ読みがアマかった自分が恥かしかったです。場数を踏んで、前に立つことに慣れないといけないなとも思いました。(以下略―渡辺)

(N・K女)

②約半年間、国語科教職課程の関連科目として国語科教育法Ⅰを受講しましたが、いろいろな考えを学ぶことができたと思います。大学の講義はどれも学ぶことはいっぱいありますが、他のどの講義よりも緊張のある空気の中で勉強してきたように思います。

朗読では、ただきれいに字を読めばいいだけではないことがわかりました。それこそ教材によって、また場面によって声のトーン、声の張り方、読む速さなどを考えなければいけないこと、細かいところでは出だしの声の高さにも注意しなければいけないとは、少しも意識したことがなかったので驚きました。もう一つ、先生からの指摘で「声が細い」と言われたことにも驚きました。自分の声の質を知らなかったのですが、認識できたことはとてもよかったです。歌を歌う際にも合う声、合わない声があるように、朗読においてもそれはあると思うので、合うときは活かして合わないときは工夫して読むなど意識したいと思います。(実際、声が細いと知ってから歌う曲を変えたらうまくいったりしました。)(以下略―渡辺)

(H・H女)

③（前略―渡辺）まず、朗読について私が学んだことは、教師の読みの大切さ々でした。毎週5名ずつ違う人たちの朗読を聞いていると、やはりちゃんと意味をつかんでいる人、つかんでいない人、子どもの理解を考えて読んでいる人、いない人の区別が段々とわかってきました。またそれは机間指導をみても同じような事がいえると思います。しかし、私の見るかぎり、私たちはまだ本を読むことになれておらず、（中略―渡辺）私たちはまだ基礎中の基礎を学んだだけなので、自分が朗読をして、渡辺先生に注意された部分は、きちんと直して行こうと思います。せつかくの成長の機会をむだにしないようにしていきたいです。（後略―渡辺）

（O・Y女）

①は、朗読の発表をとおして、朗読をする際に注意すべきことと練習の必要性を実感したと述べている。また、自らの朗読を反省し、経験を積むことを求めている。②では、朗読の際に注意すべきことを学ぶとともに、自らの声の質を認識したことに言及し、声の質を踏まえた朗読を心がけようとしている。③は、意味をつかんだ読みと生徒に理解させる読みという点から朗読をとらえ、自らの朗読を反省して、さらによいものにしていくことを期している。

朗読（範読）は、教育話法とともに教員のつけるべき大切な技能の一つである。受講した学生は、朗読発表にひたむきに取り組んだ。発表に即して行った講評をよく受け止め、朗読に活かそうとしている。また、朗読に対する意識が高まり、さらによいものにしていくとする姿勢が見いだされる。朗読は、「国語科教育法演習Ⅱ」においても実施される。

2 国語科教育学の基礎と実践事例の考察

（1）発表内容

発表は、発表資料に基づいて行われる。発表担当者以外は、テキストの発表対象箇所、および実践論文を精読し、疑問点と感想をノートにまとめて臨み、発表後に質疑応答を行う。その後、授業担当者による講評を行う。

発表内容を題目によって掲げれば、次のようになる。奇数番号は、テキスト『新・国語教育学の基礎』によった。

偶数番号は、中学校国語教育実践講座刊行会編『中学校国語科教育実践講座』（全一七巻 一九九七年三月 ニチブ
ン刊）によっている。

- ① 森田信義 「表現教育の研究」
- ② 齊藤正志 「第二学年 シナリオを書こう―売れっ子脚本家 誕生！」
- ③ 山元隆春 「文学教育の研究」
- ④ 古賀勝利 「第一学年 学び合い 一人一人の読みを拓く」
宮沢賢治「オッペルと象」（教育出版）
- ⑤ 森田信義 「説明的文章教育の研究」
- ⑥ 阿部 昇 「第三学年 文章の論理を読み、吟味する力を育てる」
呉人 恵 「『ありがとう』と言わない重さ」（三省堂）
- ⑦ 山元隆春 「読書教育の研究」
- ⑧ 中村 亨 「第一学年 意見を交流し読み深める読書」
水口博也 「巨鯨の目」（光村出版）
- ⑨ 山元悦子 「音声言語教育の研究」
- ⑩ 上野昌弘 「第一学年 帯単元としてのスピーチ学習」
- ⑪ 千々岩弘一 「言語事項指導の研究」
- ⑫ 萩原哲哉 「第二学年 語感を広げる学習」
高野公彦他 「近代の短歌」（教育出版）

（2）発表の実際①―「文学教育の研究」の場合

「文学教育の研究」の構成は、「1 概観」、「2 文学教育の目標」、「3 文学教育の内容」、「4 文学教材研究法」、「5 文学教育の方法」、「6 文学教育の研究を深めるために」となっている。この内、発表資料の

「2 文学教育の目標」に関する部分は、次の通りであった。

2 文学教育の目標 [P, 62 ~ P, 64]

(1) 世界認識の方法と現実世界を生きるためのモデルを求めて

私たちは何のために読むのだろうか。(理由とその背景)

理由1 楽しむために読む

〈背景〉：作品世界に没頭する経験に由来する、これらの感情を子どもが自ら読者として味わうように育てることが文学教育の根幹

理由2 教養のために読む

〈背景〉：多くの人々に読み継がれた作品を読みたいと思う場合の行為。学校教育において求められた基本的な読み。しかし、読者側の動機づけがかけると、浅薄なものになる。

理由3 世界認識の方法や現実世界を生きるモデルを求めて読む

〈背景〉：ある世界を小説で読み、追体験をするとき、面白さを感じる。小説に描かれる現実世界は、何らかの意味づけがされた現実であるため、現実そのものではない。それゆえ、書き手の叙法に注目することで、書き手の世界認識のありようを捉えることができる。そのことを読者自身も、ものの見方の一部とすることができる。

文学教育において求められる読みは、単に知識や教養を求めるだけに営まれるのではない。確かに、楽しむの
ために読むことも大切な部分である。しかし、教室で文学作品を扱う上でそれ以上に大切なのは、右に掲げた第
三(理由3)の読みである。

(2) 教師自身の「読みの理論」の反応としての目標

文学教育の目標には、教師自身が内に抱く、「授業で求められる読み」の理論が反映される。ここで言う読みの理論とは、読書行為に対する考え方のことである。読書行為がどのような形で私たちの生活に役立つのかという考えに関するものでもある。授業で読むということ、教師が考えるとき、

- テキスト内部の要素に関する知識を得ることだと考える教師
- 子どもの自由な読みを尊重し、その読みを交流する事だと考える教師

※など、様々な考え方がある。

文学教育の目標は

教師自身が、授業や単元においてどのような読みを目指すかという、読みに関する考えの背景に成り立つ。(教師自身の考えに左右される。)

「目標」を立てていくための文言は、これまで実に多様なものが提出された。自らが文学作品を用いて授業実践を行う場合に「目標」を立てるために、そのような文言を参照することができる。しかし、その際忘れてはならないことがある。自らの構想する授業が、なぜ文学作品を用いるのか、という問いに答えなければならない。「読むこと」の能力を高めていくだけの授業なら、文学作品を用いる必然性はない。文学作品の「目標」をどのように捉えるかは、学習を構成する指導者自身が暗黙のうちに前提とする「読みの理論」にかかっているのだ。

(一班 Aグループ A・S男、I・S女、I・N女、T・A女、N・H女)

発表資料は、さらに要点をとらえた簡略化が求められるが、「(1)」では、文学作品の読みの「理由」を枠で囲

い、その「背景」を併せて書きまとめており、分かりやすいまとめとなっている。同じく「(2)」でも、論の骨格部分を枠囲みして明確にしてまとめている。改善点はあるが、工夫の見える資料となっている。

発表者の一人は、発表後に、「要約するには、どの部分が大切なのか判断しなければならぬため、テキストを繰り返し、じっくり読まなければならなかった。どのようにまとめれば、相手が分かり易く読めるかを考えレジユメを作成した。単純な作業のように考えていたが、実際に行うと大変だった。分からない語句を調べ、何を伝えたいのか考える。あたり前のことだが、重要なことだとつくづく思った。」(I・S女)と感想をまとめている。読み深めと、聞き手に分かりやすい発表資料作りに力を注いだことが理解される。

聞き手の中の二人の学生は、テキストと発表をとおして学んだことを、次のようにノートにまとめている。

①「3、文学教育の内容」の平成元年版『学習指導要領』の中で「新しい学力観」に即して求められる能力としていわれている「再構成の力」とはどういう力のことであるのだろうか。再構成とは、読んだ内容に対して自分の考えをまとめることであるというが、この場面の再構成は「客観的な構成」であるのかそれとも「自分の構成」なのだろうか。

「4、文学教材研究法」の中で『作品を分析するための一般的な観点』ア・カは、今後の教材研究などをしていくにあたって重要な部分となりうる。(特にア・オ)。また、「5、文学教育の方法」(2)も今後どのように授業を行えばよいかの指導案として必要な内容である。そこに示されているア・ウが求められている授業の進め方であり、私たちは指導案を作成する際にはこれらを念頭に置かなければならないだろう。

(H・H女)

②文学教育をするうえで、柱となる目標は「世界認識の方法や現実世界を生きるモデルを求めて読む」である。説明文や随筆などでは学ぶことのできない世界が文学作品には広がっていると見える。人物や場面に段階的焦点を当てる。そうすることで作品世界を自らのうちにかたちづくる能力を学習者は身につけることができるだ

ろう。そのために教師が気をつける留意点は、作品を読んだ子どもの内面に生じた疑問や感想、意見を生徒が丁寧に評価するということである。また、授業に持ち込む前に生徒が想像するであろう解釈を予想することも忘れてはいけないだろう。

(T・K女)

学生の一人は、①で「4、文学教材研究法」の中の「作品を分析するための一般的な観点」は、教材研究をしていくための重要な部分となるとし、「5、文学教育の方法」(2)に示されている授業の進め方は、指導案を作成する際に念頭に置かなければならないと述べている。この学生は、テキストと担当者の発表から、「再構成の力」に疑問を残しつつも、教材研究と授業の進め方への手がかりを得ている。②では、文学教育の中心目標と、その目標を達成するための方法と留意点とに関する理解を深めている。

(3) 発表の実際②―音声言語教育実践事例の場合

上野昌弘「第一学年 帯単元としてのスピーチ学習」を対象として考察を行い、発表した。発表資料の一部を、次に掲げた。

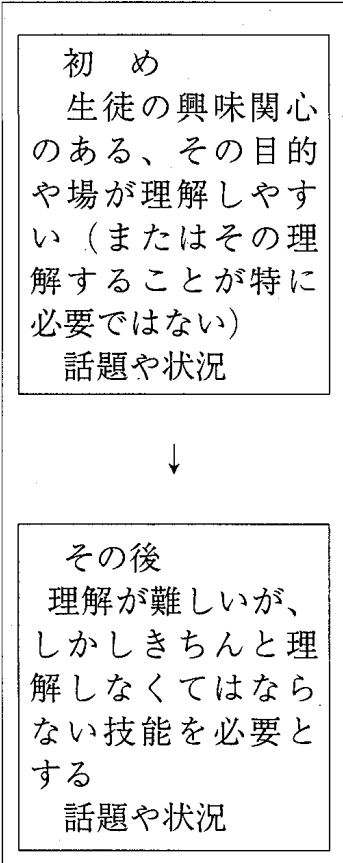
1. 話すこと・聞くこと・話し合うことによさを実感できる国語教室の構想(中略―渡辺)

『その良さ』とは、

仲間が自分の発言をしつかり受け止めてくれたり、話す相手が考えを精一杯伝えようとしたりすることによって、自分の存在、考え、気持ちを確かなものにできる。この良さを実感することによって、技能を高めていくという意欲も継続する。

(中略―渡辺)

・話したり、聞いたり、話し合ったりする力を育てるための言語活動の組織図



互いの良さを認められる相互評価をきちんと位置づける

生徒が学ぶ技能(①)②③)と教師の配慮点(*)

①目的を明らかにする力(話す主体としての自己理解)

*生徒にとって価値ある学習ができるような状況の設定、それが生徒にとってどのような価値があるか自覚を促す。

②相手の立場や考えを理解する力(他者の理解、他者と自己の関係で生まれる場を含む。)

*その場での目的を他者との関わりの中で捉えさせる。

③目的と場に応じた話し方(方法の理解)

*モデルを示す。

*より良い話し方、効き方、話し合い方にしていく観点を示したり、生徒に気付かせ実際にその観点から見直し、改善する活動を位置づける。

考察

音声言語教育は、話すこと、聞くこと、話し合うこと、つまりコミュニケーションの価値を生徒が十分に実感していなければ意味を持たない。価値の実感をするために、国語の授業の中での活動の指針として、この構想は、年間を通じた実践において活動の状況が、易↓難へと生徒の発達に応じてレベルアップしていく。その中で、生徒も自己理解、他者理解、方法理解を経験し、つかみ取っていく。一つ一つの活動でコミュニケーションの価値を生徒が実感しやすくしようとしている点が優れていると感じた。

実践論文の論旨を一部図式化したり、ポイントを抜き出したりして、分かりやすい発表資料が作成されている。考察では、本実践の優れた点を、コミュニケーションの価値を実感的に理解させること、展開を易↓難にし、その過程で自己理解と方法理解を学ばせようとしていることに見いだしている。適切な考察といえる。

発表担当者の一人は、次のように感想を述べている。

この国語教室の構想は、本当にすごい!と思った。毎回の国語の授業のはじめ10分をスピーチにあてていることだけでなく、本来、「話す」ことに重きを置いた指導しかなかったスピーチで、その他に「聞く」「メモをとる」「要約する」「コメントを書く」ことまで学習させていることである。この方法なら、生徒たちは、責任をもって取り組むことができる。これは、^{マイ}ぜき、実践の参考にしたいと思った。

今回は、私自身のグループの発表だった。この実践がとても優れていることは、初めに読んだ時には、感じていたが、いざ取り組んでみると、思った以上に要約しづらい所や理解しにくいところがあり、苦労した。特に、私は、^クー話すこと・聞くこと・話し合うことのよさを実感できる国語教室の構想^クを要約、考察したのだが、先生に、考察をほめられて、本当に嬉しかった。なぜなら、あの考察を、仕上げるのに何日もかかり、^メ切り当日まで、悩みぬいてできたものだったからだ。生みの苦しみ(?)に耐えてこの喜びだと思った。こ

の発表を通して、同じ班、特にBグループの人達には、感謝している。(以下、感謝のことばは省略―渡辺)

(Y・Y女)

担当箇所の発表資料作りの苦勞について記すとともに、実践の優れた点に学び、自らの実践の参考にしたいと述べている。優れた実践に学ぶことが、実践への思いを引き出している。

聞き手の学生の感想は、次のとおりであった。

今回の実践は、とても興味深いものであった。教師は年間を通しての生徒の成長に期待し、着実な進歩を望んだ。これは、教える側が忘れがちなことであると思う。「教える＝早期修得」を望むのはどんな教師でも変わらないが、長い目で子どもを見つめるという広い捉え方をどのくらいの教師が持っているだろうか。この実践には、一人ひとり自分の実力に合った段階が踏めるようなしかけがいくつか存在するだろう。まず急に表現活動に入るのではなく、メモを取ることで自分の表現したい、すべき内容を把握する。次に、仲間の評価は子どもたちにとっては素直に受け入れることのできる格好の評定である。同時に聞く力の要請にもなるなんて、すばらしい。さらに最も重要なのは、教師の評価である。子どもは大人に何らかの評価を常に求めている。例えその出来映えが良いものでなかったとしても、なぜ良くないか、どうしたら良くなるのか、きちんと評価してあげることが大切である。この実践では、必要に応じてコメントをつけていたようだ。今回の実践は、とても参考になる真似したい!と思えるような例であった。5班Bグループさん、ありがとう。(T・K女)

この学生は、実践に「教える側の忘れがちな」「長い目で子どもを見つめるという広い捉え方」を発見した。また、実践の「一人ひとり自分の実力に合った段階が踏めるようなしかけ」に気付き、参考にし真似したい実践だと考えるに至っている。

担当者によるグループの徹底した話し合いによる発表資料の作成、資料に基づく説明、担当者以外は、精読し質問

と感想をまとめて臨み、発表後に質疑応答を行う。このような過程をとおして、なお、不十分で、未消化な点がありながら、理論と実践への理解を深めているといえる。不十分で、未消化な点も、教職科目の新たな履修、教材研究、模擬授業と進行していく中で、理解が深まっていくことを期待したい。

四 「国語科教育法Ⅰ」受講の感想

受講後の感想は、左記のとおりであった。

①表現・文学・説明的文章・読書・音声言語・言語事項と、様々な分野・面から国語教育について学んで行く事が出来た。

Aグループの教科書解説だけではなく、Bグループの実践例を持つてくる事で、より具体的に理解する事が可能になったと思う。

すべての国語の授業において、教師側がこれ程までに指導研究をしていたのだと初めて知った。もちろん、ここで取り上げた実践例は全て良い例である事は理解している。私の今まで受けてきた国語の授業と、明らかに違う方法であったり、似た様な方法（この実践例を目標にやりたかったのだらうと思われる方法）もあった。

1人ひとりの教師が、1つの授業でここまで集中して教材を研究し、生徒の実態を把握する事が出来るのなら、どんなに国語の授業が楽しく感じたであろう。

5班Bグループの発表時のコメントにもあった様に、国語を学び成長していく事は、人間関係を上手くつなげるコミュニケーション能力を成長させていくものなのだと私も考える。

「授業をする何倍もの時間を、教材研究や指導方法を考える時間にあてなければならぬ。」という言葉が、本当の意味で、実感として理解する事が出来ました。（後略―渡辺）
(M・S女)

②私は、この「国語科教育法Ⅰ」を受講するにあたって、朗読や研究発表などを通して、さまざまなことを学ぶことができた。今までは、知識を頭で得ているだけであつたが、この「国語科教育法Ⅰ」を通し、体でも体感して教員になる上での知識を得ることができたと感じる。特に実践記録の研究発表においては、国語教育に必要な事柄を、みな言葉でわかりやすく理解することができた。実践記録の研究、発表を通して感じたことは、我々教師側は、本に記載されている実践記録だからといって内容すべてをそのまま鵜呑みにしてはいけな
いということである。すべてが生徒にとって良い授業であり、すべてが成功事例とは限らないからだ。大切なのは、すべての実践記録に対し、批判の目を持って捉えなければいけないことである。成功事例からも失敗事例からも、必ず得る知識はある。それが生徒にとって、果たして本当に良い実践か、ならばどの部分が良いのか、逆に悪い実践なら、どのようにすれば良くなるのかといった「追求する姿勢」が、教師側に求められているのだと感じた。「追求する姿勢」を持つということは、並大抵まのことではない。なぜならそれは「追求し続ける姿勢」でもあるからだ。教師はこの姿勢を持ち続けてこそ、生徒に「学ばせる」ことができるのではないだろうか。今回この国語科教育法Ⅰを受講して、私は以上のような大切なことを学ぶことができ、改めて教師という仕事の大変さ、奥深さを知ることができたと感じる。

(G・A女)

③教職過程を履修している私にとって『国語科教育法』という講義はとても魅力のある授業であつた。それは、今まで私を受けてきた国語の授業を一つ一つ思い出す時間でもあつた。国語という教科を教師の立場から見るといふことは、とても新鮮で身につけたい技術や考えを確実に自分のものにするということである。例えば、私達五班Bグループが発表した「音声言語教育の研究」〈帯単元としてのスピーチ学習〉では、まず音声言語教育の本質を捉えていないとあの様な授業は展開できない。人間関係作りの連動までも視野に入れ、話す力、聞く力、話し合う力を育てていくのである。また、渡辺先生がおっしゃった、「このスピーチ学習において一番重要なことは『失敗させない』ことである」という話にとっても感動した。近年の国語嫌い、国語力の低下等はこうした教師のちよつとした、しかし、とても重要な配慮で防ぐことができるのだと思う。

他にも、私達が何気なく受けてきた、「文学」や「読書」、「作文」や「説明的文章」等の指導の裏には、こんなにとくさんの考えや分析の上にあるのだと気付く機会はないと言っている。しかし、『国語科教育法』を学んで確実に今、前期にいた自分とは違う自分がいる。

最後に「朗読」について、教職合宿の30秒スピーチよりも緊張したのを今でも覚えている。今まで私は、教師の範読はいつでもどこでもできるものだと思っていた。しかし、文字から読み取るということの大変さや、その読み取ったものを声に出して音読するだけで生徒に伝えるということの難しさを初めて肌で感じた。やはり教師は凄い。この半年で学んだこと、これから学ぶことをしっかりと力にしていこうと思った。(M・Y男)

④国語科教育法を受講して、私たち2年次はまだまだ甘いということを感じさせられた。

教科書の要約については、まとめることは出来るけれども、発表の時にはそれを読みあげるだけで、具体例を挙げてわかりやすく説明しようという工夫が見られない。

また、実践では、実践者の実践について肯定するばかりで、否定が少なかった。まだ、批評の目が養われていないということである。

国語科教育法を受講して、上記のような弱点が露呈してしまった。しかし、裏を返せば、自分たちが今、力をつけなければいけない部分をはっきり確認できたということである。その力をつければ、今よりも成長することができるということである。

自分に今、何が足りないのか確認できたことによって学習意欲が湧いてきた。

国語科教育法を受講して良かったと思った。

(T・J男)

①②③では、朗読、テキストと実践事例の研究発表によって、学生は様々なことを学んだと述べている。その学びは、①によれば、テキスト(論)と実践事例を組み合わせた発表によって、より具体的に理解することが可能になっ

たとし、②では、体感して教員になる上での知識を得ることができたと感じると述べている。③では、国語という教科を教師の立場から見ることによって、身につけたい技術や考えが確実に自分のものになると述べている。他に、受講をおして、①は、授業準備としての教材研究や指導方法の大切さを実感的に理解したとし、②は、批評の目を持ち、追求する姿勢を持つことの大切さに気付いたとする。③は国語科教育の各分野ごとに論と分析の蓄積があることに気付いている。④は受講によって弱点が露呈したとしているが、それはつけるべき力、すべきことの自覚につながったとする。

これらの学びには、次の点がおおきく働いたといえる。ア・論（テキスト）とそれに関連した実践事例を教材としたこと。イ・グループによる研究発表の方式で進めたこと。研究発表では、担当グループで徹底した討論による読み込み、発表資料の作成、分かりやすさを心がけた発表が必要とされた。担当者以外は、発表箇所を精読して疑問点を書きまとめ、発表後には感想を書くことを課していた。さらには、ウ・教員を目指す学生が高い意欲を持って臨んだこと。これらが上述の学びに効果をもたらしたと考えたい。

おわりに

「国語科教育法Ⅰ」を、前述したとおり、次のような目標のもとに指導した。

- ① 国語科教育の諸領域に関する歴史と理論の概要を理解させる。
 - ② 国語科教育の諸領域に関する実践事例を検討し、優れた点に学び、生かせるようにさせる。
 - ③ 朗読の方法に学び、よりよい朗読ができるようにさせる。
 - ④ 以上をおして、国語の力（ア・読解力、イ・表現力、ウ・話表力、エ・聞解力）をつけさせる。
- 以上の目標を踏まえ、1、国語科教育の理論と実践の理解、2 朗読、3 国語の力の3点にしぼって、考察の結果をまとめた。

1 国語科教育の理論と実践の理解

発表方式によって理論の概要と実践事例の考察を行わせた。担当者によるグループの徹底した話し合いによる発表資料の作成、資料に基づく発表を指導した。担当者以外には、精読し質問と感想をまとめて臨み、発表後に質疑応答を行うことを課した。このような過程をとおして、なお、不十分で、未消化な点がありながら、理論の概要と実践への理解を身につけたものとして深めていることがうかがえた。不十分で、未消化な点も、教職科目の新たな履修、教材研究、模擬授業と進行していく中で、理解が深まっていくことを期待したい。

2 朗読

受講した学生は、朗読発表にひたむきに取り組んだ。発表に即して行った講評をよく受け止め、朗読に活かそうとしていた。また、朗読に対する意識が高まり、さらによいものにしていくとする姿勢が見いだされるに至った。朗読は、「国語科教育法演習Ⅱ」においても実施され、技能がさらに高まることが期待される。

3 国語の力の向上

ア・読解力、イ・表現力、ウ・話表力、エ・聞解力の向上する場として、研究発表、朗読、ノートの作成等に、意識的に設けた。観察によれば、イ・ウの向上には見るべきものがあつた。それにともなつて、アの向上も推察されるが判断は留保したい。また、エについても、その向上が推察されるが、同様に留保に従いたい。科目外の場（合宿その他）においてもさらに観察を続けたい。

全体をとおして、次のように考える。これらの学びには、次の点がおおきく働いたといえる。ア・論（テキスト）とそれに関連した実践事例を教材としたこと。イ・グループによる研究発表の方式で進めたこと。研究発表では、担当グループで徹底した討論による読み深め、発表資料の作成、分かりやすさを心がけた発表が必要とされた。担当者以外は、発表箇所を精読して疑問点を書きまとめ、発表後には感想を書くことを課していた。さらには、ウ・教員を目指す学生が高い意欲を持って臨んだこと。これらが上述の学びに効果をもたらしたと考えたい。

〔参考文献〕

全国大学国語教育学会編『国語科教師教育の課題』（一九九七年一月 明治図書刊）